Champavert, Contes immoraux: Pétrus Borel

紀田順一郎 荒俣宏 責任編集

世界幻想文学大系 ㉑

シャンパヴェール悖徳物語

P・ボレル

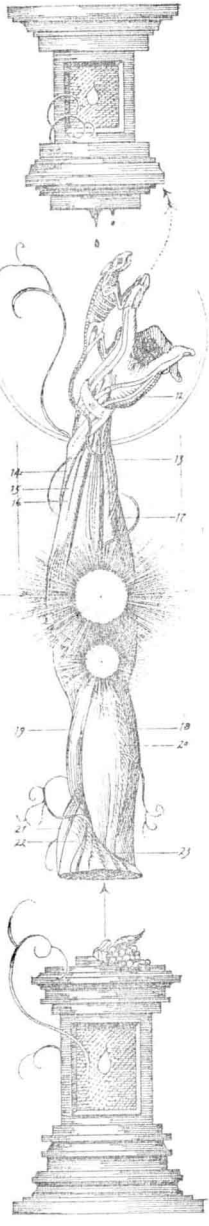
川口顕弘 訳

Champavert. Contes immoraux. Pétrus Borel

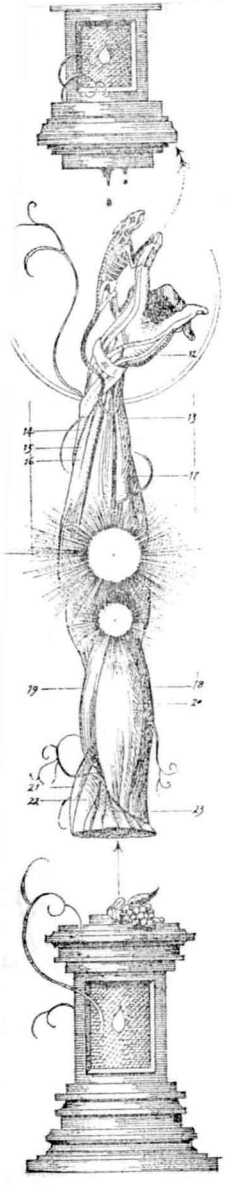
国書刊行会

世界幻想文学大系　責任編集―紀田順一郎＋荒俣宏
第二一巻

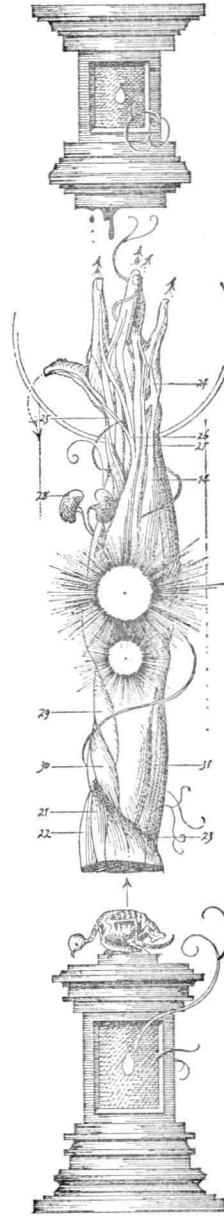
シャンパヴェール悖徳物語
昭和五五年十二月二〇日印刷　昭和五五年十二月二五日初版第一刷発行
著者――ペトリュス・ボレル
訳者――川口顕弘
発行者――佐藤今朝夫　発行所――株式会社国書刊行会
東京都豊島区巣鴨三―五―一八　郵便番号一七〇　電話〇三―九一七―八二八七　振替東京五―六五二〇九
造本――杉浦康平＋鈴木一誌　本文挿画――渡辺冨士雄
印刷――セイユウ写真印刷株式会社　製本――大口製本印刷株式会社
定価――三、四〇〇円
●―落丁本・乱丁本はおとりかえします



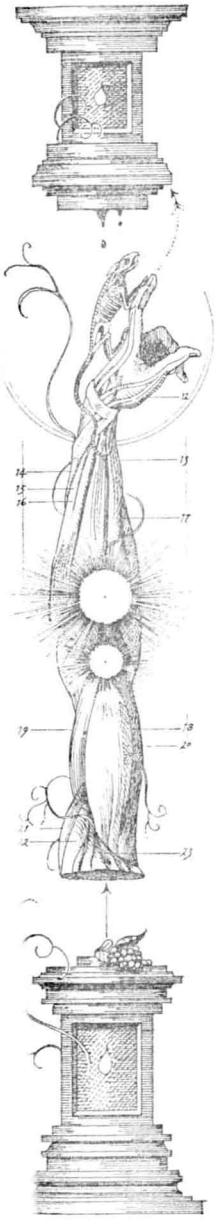
川口顕弘かわぐちけんこう
一九三四年、旧満州生れ。
早稲田大学第一政治経済学部卒業後、
同文学部大学院博士課程終了。
現在、千葉商科大学助教授。
専攻、フランス文学。
主要訳書――
ゴーチェ『魔女伝説』森開社、一九七九年。
ボレル『狂想賦』国書刊行会、一九八一年。



世界幻想文学大系——第二十一巻



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.



シャンパヴェール悖徳物語

P・ボレル——川口顕弘＝訳

目次

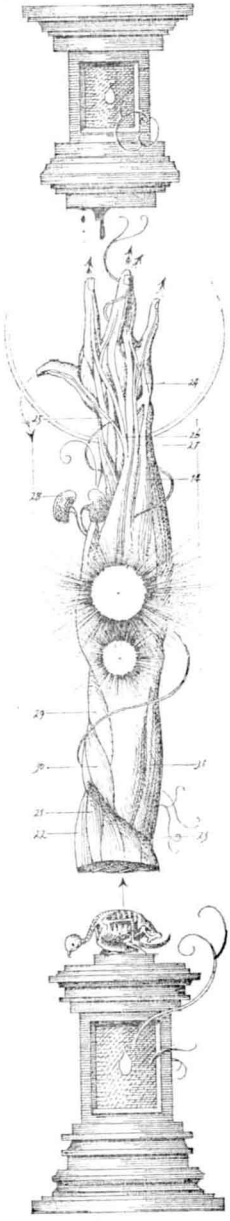
7——シャンパヴェール悖徳物語　P・ボレル

9——シャンパヴェールについての覚書

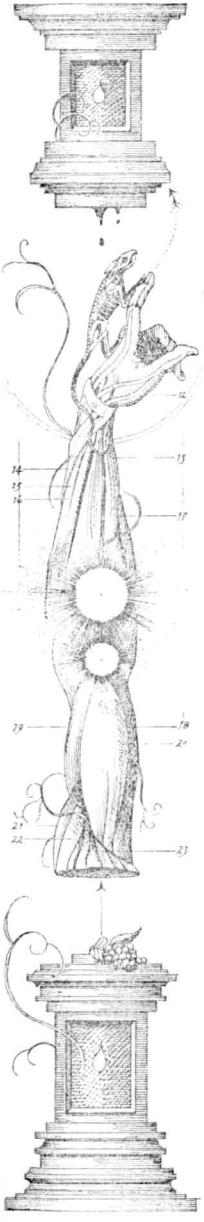
63——訴追官ド・ラルジャンチエール氏

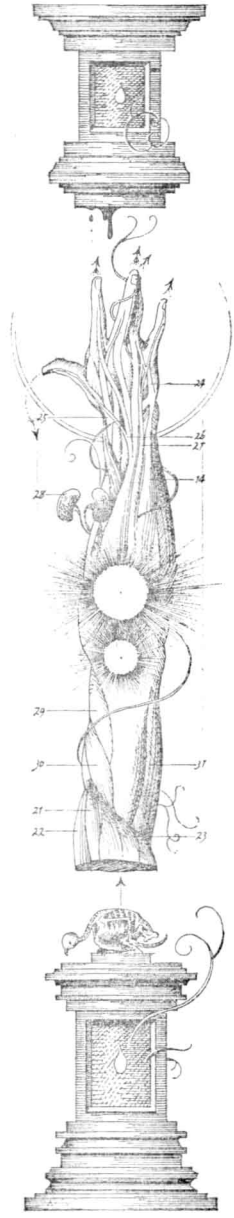
113——大工ハケス・バラオウ——ハヴァナの物語

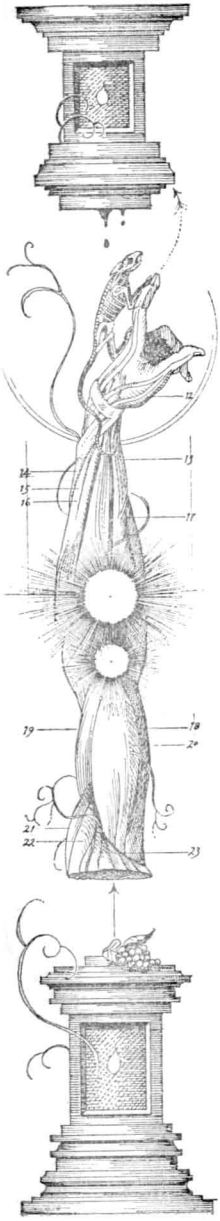
139——解剖学者ドン・アンドレア・ヴェサリウス——マドリッドの物語



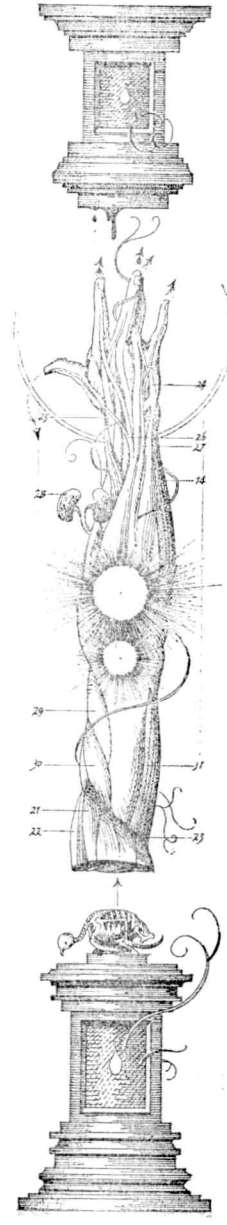
171——魔術師三本指のジャック——ジャマイカの物語
211——美しきユダヤ娘ディナ——リヨンの物語
293——学生パスロ——パリの物語
405——狼狂シャンパヴェール
443——解説——川口顕弘



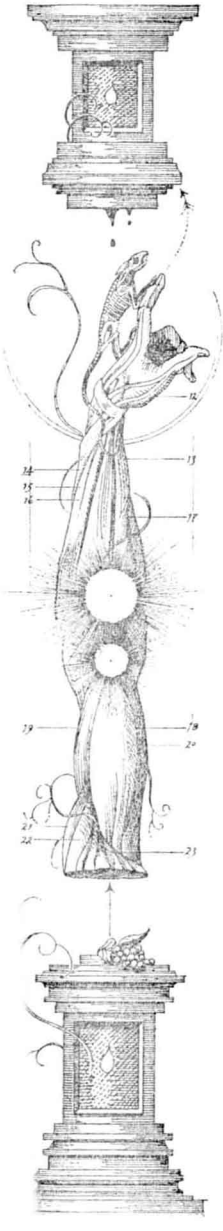

24
25
26
27
14
28
29
30
31
21
22
23



シャンパヴェール悖徳物語



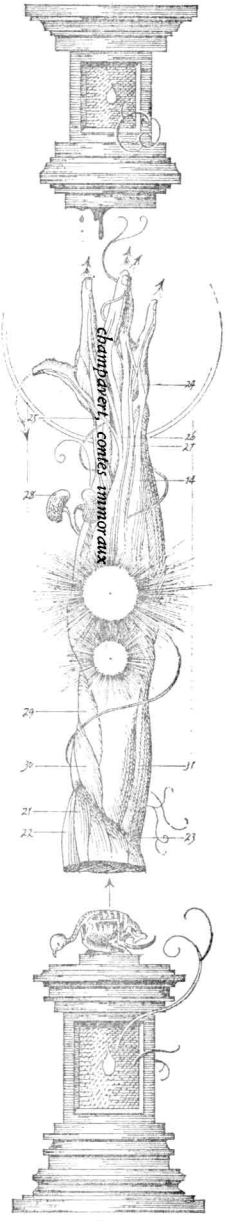
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.



シャンパヴェールについての覚書

他人の誤りを正し、迷妄の夢を覚してやろうなどとする仕事は、いつ如何なる場合にも甚だ辛いお役目である。人々がとかく陥りがちな甘美な過ちや彼らが日頃馴れ親しみ、信じて疑おうともせぬ虚偽を大衆から取りあげてしまうなどと云うことは、これまたいつ如何なる場合にも甚だ辛い苦業に違いない。いったい何が危険と云って、人の心にぽっかりと大穴を開けてしまうことぐらい危険なことがあろうか。だから私は決してそう云う危ないお役目など引き受けるつもりはないのだ。それ故、読者諸氏よ、せいぜい信じているがよい。信じこみ、誤解し、欺かれていればよい！……過ちと云うものは殆ど常に愛すべきものであり、心の慰めとなるものだからである。と云うわけで、真実を語ることなどには極めて冷淡な私だが、それにも拘わらず、その私が今日、宗教的とも云うべきわが真摯さの故に、心ならずもつい、或る虚偽の仮面を剝ぐと云う義務を己に課してしまったのである。もっとも幸いなことに、虚偽と云ったって大したものではなく、それはただ偽名の問題に過ぎないのだ。だからお願い申し上げる。読者諸氏よ、どうかお腹立ちなさらぬように。どうも一般に諸氏は、クロチルド・ド・シュルヴィルなんて人間は実在せず、彼女の書物は偽書であるとか、ガンガネッリとカルリーノの往復書簡は眉唾ものだとか、或いはまたジョゼフ・ドロルムなんてものは偽書の作者で *1、彼の伝記は謎だとか、とまあ、そう云った種類の話を聞かされると、常にお腹立ちになるようである。だがどうか、どうかお願いだ！　ボレルという名が実は偽名だったからと云って逆上なさらぬよう、切にお願い申し上げる！

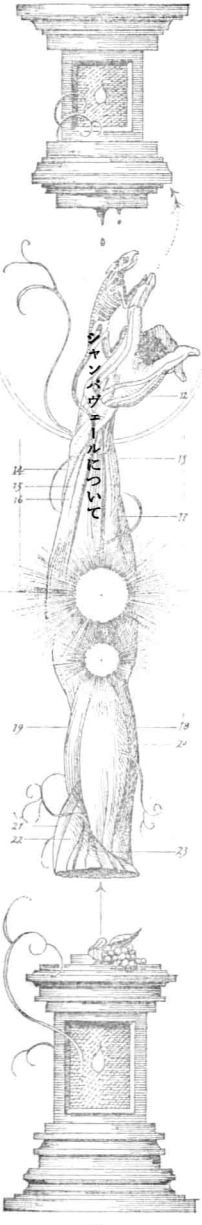
ペトリュス・ボレルはこの春、自殺してしまったのである。彼の魂が（霊魂の存在など、彼はもう信じてはいなかったが）、神の御



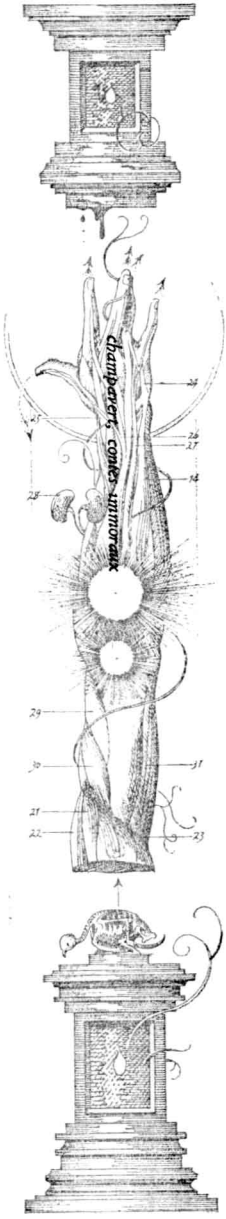
前で（彼は神の存在を否定していたが）お恵みを得られるよう、更にはまた彼の過ちが、世の常の罪同様に神の手で罰せられたりしないよう、彼のために祈ろうではないか。

かの〈吟遊詩人〉、かの〈狼狂〉たるペトリュス・ボレル。彼は自殺してしまったが、先程申し上げた如く真実のみを述べるとすれば、その名は実はこの青年の渾名であって、彼はまだやっと大人になるかならぬかの内から、この渾名を名乗っていたのである。従って彼の仲間たちの中でも、その本名を知っている者は殆どいない。ましてや何のためにそんな偽名を名乗ったのか、その理由を知る者は誰もいない。何か必要でもあったのだろうか、それとも単なる気まぐれなのだろうか？　今となっては全然解らぬことである。むかし、これと同じ名が文学と学問の方面で知られていたことはある。即ちペトリュス・ボレル・ド・カストルがその人であって、彼は学識深き博士であり、考古学者であり、ルイ十四世の侍医であり、かつまた詩人ジャック・ボレルの息子であった。してみれば、彼は母方からこの一家の血を引いていたのだろうか、そして自分の先祖の名の一つを復活しようと望んだのでもあろうか？　今となっては全然解らぬことであるし、多分、今後とも解ることはないであろう。

*1—十五世紀の女流詩人クロチルドの詩集（一八〇三年刊、補遺詩集一八二三年刊）と称されるものは、実はシュルヴィル侯爵ジョゼフ・エチエンヌの作。ローマ教皇クレメンス十四世（ガンガネッリ）と喜劇俳優カルロ・ベルチナッツイ（カルリーノ）の往復書簡集（一八二七年刊）と称されるものは、実はアンリ・ド・ラトウーシュの作。夭折した無名詩人『ジョゼフ・ドロルムの生涯、詩、及び思想』（一八二九年刊）は、実はサント・ブーヴの作であった。



シャンパヴェールについて



本書の表題として、我々が彼の本名を選んだのは、以上の如き理由からである。即ち、シャンパヴェールと云う名こそ、彼の本名だったのである。

今は亡き誰かの心、感受性豊かな、卓越した人間の心の奥深くへ降りて行くことほど、快い喜びがあろうか。或る偉大な芸術家の、または或る不幸せな男の、生の秘密に通じようとすることは、称讃すべき不遠慮さと云うものであろう。人々の生活はしばしば秘密に閉ざされている。従って我々にとって大切な人々の生活を、さながら壁飾り(タピスリー)の絵を見るように、好んで鮮やかに描いて見せてくれる作家は非常に喜ばれる。それに引きかえ我々が今、ここで問題にしている詩人――この若く、不運な宿命を持った詩人の生活は、さほど読者の興味を刺激しないかも知れない。だが、彼の異常な人生の中から、ここで私が若干の事実と生活状況とを掘り起して御覧に入れるなら、読者もおそらく、それを不愉快に思ったりはなさるまい。とは申せ、残念ながら、知られた事実はほんの僅かなものではあるが。

シャンパヴェールは滅多に自分のことを口にせぬ男であった。彼は平たく申せば幽霊の如く、どんな過去を持っているのか、行末どう云うことになるのか、誰にも知られぬまま忽然とこの世に生じて来たのだった。

その出身がオート・ザルプ県であること、その生れが古代のセギュジーの地であることについては、幾つかそう信ずべき理由がある。彼はしばしば、父親が山を降りて平地に住み始めたことを呪ったり、自分の同郷人として、フィリベール・ドロルム、マルテ

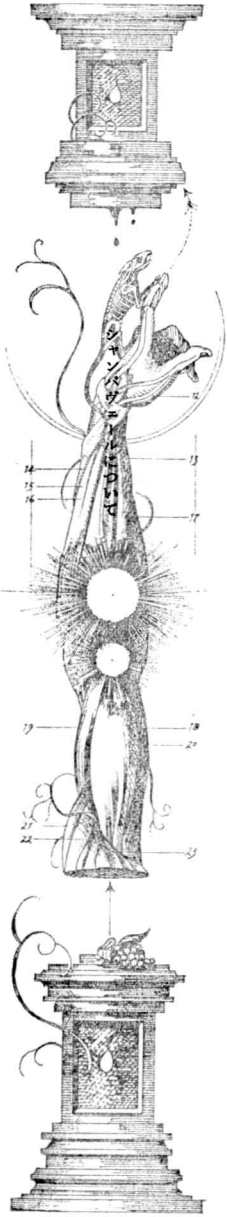
ランジュ、セルヴァンドニ、オードラン、ステラ、コワズヴォクス、クストー、バランシュ *1 などの名を、誇らしげに語っていたからである。だが彼が郷里を離れたのは幼い頃であった。

彼の年齢は、近くから見ればせいぜい二十歳から二十二歳ぐらいに見えたが、その重々しい表情を見れば、一見したところ、それより遙かに老けて見えた。

背はかなり高く、ほっそりしていた。おそらく、華奢だったと言ってもよかろう。皮膚は浅黒く、横顔に特徴があり、眼は大きく、眸は黒かった。そのまなざしにはどことなく人を不快にさせるものがあった。相手をひたと見据えると、まるで獲物を引きこむ蛇の眼のように、じいっと喰いこむ眼つきになるのだ。

レオナルド・ダ・ヴィンチと同様、彼もまた時代の習慣に逆らって、十七歳の時から長い顎ひげを蓄えていた。家族の者がどれほど必死に頼んでも、その顎ひげを剃落させることはできなかった。この異様なスタイルにかけては、彼はアンリ・サン・シモンの

*1—フィリベール・ドロルムからバランシュまでは、すべて十五世紀から十九世紀にかけて活躍したリヨン出身の芸術家、建築家、画家、彫刻家、作家などだが、中にはオードラン家やクストー家のごとく、一族の中から芸術家を何人も輩出した例もある。政治家、実業家、軍人、官吏、宗教家などは一名も挙げられていないことに注意。但し、コワズヴォクスのみ未詳。

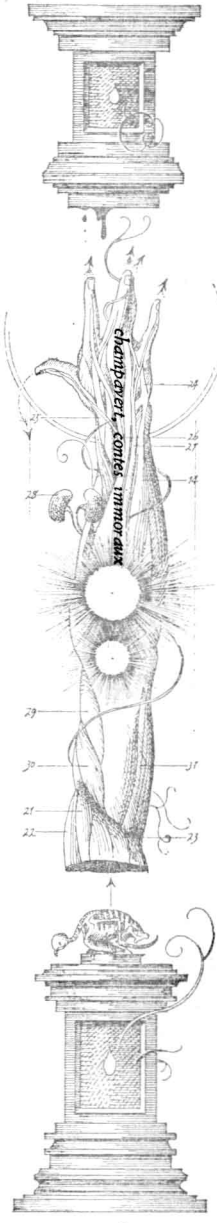


使徒たちより四年も早く先んじていたのだ。そうだ、彼は聖ブリューノ *1 に非常によく似ていたと言えば、その風貌を最も正確に伝えることになろうか。

その声と態度は穏やかで、初めて彼に会う人々を大いに驚かせるのだった。と云うのも、人々は彼の文章や詩を読んで、彼のことを恐ろしい人喰鬼か何かのように想像していたからである。その人となりは善良で、穏和で、叮嚀で、かつ傲然としたところ、頑固一徹なところ、世話好きで親切なところがあった。スペインの高貴な言葉を用いれば〈天性の慈愛(アモロソ・コン・コス・スヨス)を備えた〉愛情深い彼の心は、まだ利己主義(エゴイズム)や金銭などに害なわれてはいなかった。だが一旦、その心が深く傷つけられると、彼の憎悪は彼の愛情と同様、もはや抜き難く激しいものとなるのである。

人々の集まりに連れて行かれると、彼はそこに、あたかも森の外へ追い立てられた鹿のような、一種、苦しげな憂愁(メランコリー)の雰囲気を持ちこむのだった。

彼の少年時代のことについても、詳しいことは殆ど何一つ解っていない。解っているのは、彼自身が親しい仲間たちに自分からしゃべったことだけである。彼は極端に意思が強く、大胆で、強情で、尊大であった。世の習慣とか風習とかに対する侮蔑は天性的なもので、彼がまだ極く幼い時分から一度も曲げられたことがなかった。たとえば、彼は服を着るのが大嫌いで、生れてまる何年間かはずっと裸で通したと云う。最低限必要な服を着せられることでさえ、かなり後になってからでなければ承知しなかったと云



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.